

コレクション 大航海

えぞ いづ ひろご
蝦夷発→異国経由→兵庫行

大航海、大公開。



神戸市立博物館
KOBE CITY MUSEUM

蝦夷地へのまなざし

大航海時代以降、多くの探検家の航海により、世界の全貌が明らかになってきた。ただし、ヨーロッパから遠く離れ、寒さの厳しい日本北辺は、長きにわたって未知の土地であった。世界初の近代的地図帳『世界の舞台』(No.1,2,3)にも日本は登場するが、日本北方の島々は描かれていない。イエズス会宣教師たちが来日すると、日本北方にある島「蝦夷地」の存在がヨーロッパに伝えられるが、測量はしていなかったため、その形については



挿図1 プリエ『日本図』 1650年頃

不明であった。そのため、地図上では南端部のみが示される場合が多かった(No.5、挿図1)。1643年、オランダ東インド会社のフリースは、日本東方海上にあると噂されていた「金島・銀島」を求めて大海原に乗り出した。フリースは北海道や南千島、樺太を調査し、その成果は様々な地図に用いられた(No.6、挿図2)。ただし、北海道及び樺太については東海岸しか調査していなかったため、北海道がユーラシア大陸と陸続きなのか島なのかを



挿図2 ヤンソン『日本及び蝦夷図』 1659年

特定することはできず、結果として多様な日本北辺像が生まれる。18世紀、ロシアにおいてはユーラシア大陸とアメリカ大陸が北方で接続しているのかがどうか、大きな関心事となっていた。これを解き明かすため、ベーリング探検隊は2度に渡ってカムチャッカ方面に遠征する。その際、別動隊のシュパンベルグは、カムチャッカから出発して千島列島及び日本東海岸を測量した。ベーリングの北方大探検は、ユーラシア大陸とアメリカ大陸が海峡によって隔てられていることを明らかにしたが、日本北辺の測量成果が地図に与えた影響は部分的なものにとどまった。

18世紀後半には、イギリスやフランスの探検隊も日本北辺を訪れるが、この場所の調査で成果をあげたのがフランスの航海者ラ・ペルーズである。ラ・ペルーズはアジア東北部からカムチャッカへ向かう途中でラ・ペルーズ海峡(宗谷海峡)を発見した。これによってフリースの図ではつながっていた北海道と樺太が、

それぞれ独立した島として地図上に描かれるようになった(No.10)。

その後も、イギリスの航海者プロトンが北海道南岸及び西岸と樺太西岸を、ロシアのクルーゼンシュテルンが北海道西岸と樺太東岸を測量し、これらの測量成果をもとにした地図が作製された。こうして19世紀になってようやく、現在とほとんど変わらない日本北辺の姿が世界に知られるようになったのである。

近接する日本においてさえも、日本北辺の姿を正確には把握していなかった。安土・桃山時代頃から、北海道は日本製の地図に描かれるようになる。しかし、どの図においても渡島半島が示されるにとどまっておき、内部の地名も「松前」のみ記されるものが多かった。存在こそ知られているものの、地名や地形などについては未知であった。

初めて北海道の内部に調査が及んだのが、江戸幕府による国絵図編纂事業である。正保元年(1644)、幕府は各地の大名に国絵図の作製を命じるが、蝦夷地の地図は渡島半島南端に居城を置く松前藩によって作製された。しかし、松前藩が提出した国絵図は、北海道や樺太が極端に小さく、千島列島の位置関係も実態とはかけ離れていた。また、地名や地形などの情報も、渡島半島以外は乏しいものであった。

しかし、18世紀末になると状況は一変する。1771年、ポーランドの軍人ベニョフスキーは日本に上陸すると、オランダ商館長宛にロシアの千島・北海道進出の野心を伝える書簡を送った。このことが識者の間で広まると、北方への関心が一気に高まった。

天明5年(1785)に、幕府は初めての蝦夷地探検隊を派遣し、北海道、樺太、千島の測量調査が実施された。この探検に測量助手として加わった最上徳内は、以後も蝦夷地調査を続け、いくつもの地図を作製した。「蝦夷草紙全図」(No.19)は徳内の地図の写と考えられる。翌年には、林子平が『三国通覧図説』(No.14)を刊行し、海防の重要性を

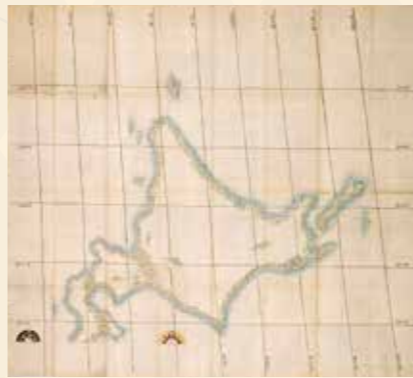


挿図3 林子平『蝦夷国全図』 天明5年(1785)

訴えた。『三国通覧図説』の附図『蝦夷国全図』(No.16、挿図3)は、地形こそ南北にのびているが、中国東北部からカムチャッカ半島まで広い範囲を捉えている。また、択捉島でロシアとの交易がはじまったことなど、当時最新の対外情勢も記されている。

寛政4年(1792)には、ロシア使節のラクスマンが国交の樹立を求めて来航した。この時は長崎への入港許可書を発行して、事なきを得るが、以降も外国船の来航が続いたことから、日本北辺の海防は喫緊の課題となった。

こうした情勢を見込んで、蝦夷地測量に名乗りをあげたのが、伊能忠敬である。忠敬の真の目的は、緯度を計算するための長距離測量にあったが、幕府の許可を得るために蝦夷地測量という建前で、測量の旅に向かった。忠敬は北海道の南岸を測量するが、それ以外のところは未測量のままであった。そのため、



挿図4 伊能忠敬「伊能小図 北海道」 文政4年(1821)頃

忠敬に測量の手ほどきを受けた間宮林蔵が以降の北海道及び樺太・千島の沿岸測量を担った。「伊能小図 北海道」(No.23、挿図4)は、主に林蔵の測量成果をもとにして作製され

た図であり、北海道の海岸がほぼ正確にあらわされている。

嘉永6年(1853)ロシア使節のプチャーチンが、国交樹立と樺太・千島の国境確定を求めて、長崎に来航すると、日本北辺に対する関心が再び高まり、

民間で日本北辺を描いた木版地図の刊行ラッシュが訪れた(No.31~34)。このうち『蝦夷闔境輿地全図』



挿図5 橋本玉蘭齋『蝦夷闔境輿地全図』 嘉永7年(1854)

(No.33、挿図5)は、北海道の形こそ扁平だが、沿岸部には地名が細かく書き込まれるほか、アイヌと和人の交易拠点である運上屋

や漁業施設兼宿泊施設の番屋などが詳細に記されている。

アイヌと和人の交易が主に沿岸部でおこなわれていたこともあり、これまでの蝦夷地測量は沿岸部が中心であった。しかし、松浦武四郎は弘化2年(1845)から安政5年(1858)にかけて6度の蝦夷地探検を実施し、北海道内陸部の地形及び地名を詳細に描いた『東西蝦夷山川地理取調図』(No.35)を上梓する。明治2年(1869)、武四郎は開拓判官に任命されると、これまで蝦夷地と呼ばれていた土地を「北海道」と名付けた。『北海道国郡図』(No.36)には同年に決定した11カ国86郡の境界が示されている。

出品目録 「蝦夷地へのまなざし」(3階 特別展示室1)

No.	作者名	作品資料名	時代	所蔵
1	A.オルテリウス	世界図	1587年	
2	A.オルテリウス	タルタリア図	1570年	
3	A.オルテリウス	太平洋図	1589年	
4	F.ラングレン	東アジア図	1596年	
5	P.プリエ	日本図	1650年頃	
6	J.ヤンソン	日本及び蝦夷図	1659年	
7	R.ダッドリー	日本及び蝦夷図	1661年	
8	J.プラウ	世界図	1662年	
9	ダンヴィル	アジア図	1753年	◇
10		日本北航海測量図	1798年	
11	J.アンドレヴォ	アジア図	1854年	
12	石川流宣	本朝図鑑綱目	貞享4年(1687)	□
13		日本輿地細見図	宝永年間頃(1704-11)	□
14	林子平	三国通覧図説	天明6年(1786)	☆
15	林子平	三国通覧輿地路程全図	天明5年(1785)	□
16	林子平	蝦夷国全図	天明5年(1785)	□
17		蝦夷全図	江戸時代、18世紀末	□
18	長久保赤水	蝦夷松前図	江戸時代、18世紀末	□

No.	作者名	作品資料名	時代	所蔵
19		蝦夷草紙全図	江戸時代、18世紀末	□
20		大日本接壤三国之全図	文化13年(1816)	◇
21	高橋景保識 平茂質撰	日本辺界略図	文化6年(1809)	□
22	高橋景保識 永田善吉刻	新訂万国全図	文化7年(1810)	□
23	伊能忠敬	伊能小図 北海道	文政4年(1821)頃	□
24	開成所	官板実測日本図 北蝦夷	慶応元年(1865)	☆
25	開成所	官板実測日本図 蝦夷	慶応元年(1865)	☆
26	間宮倫宗口述 秦貞廉	北蝦夷図説	安政2年(1855)	
27	阿部喜任纂述 松浦武四郎校訂	蝦夷行程記	安政3年(1856)	
28	松浦武四郎	蝦夷漫画	安政6年(1859)	☆
29	鈴木重尚著 松浦武四郎注 橋本玉蘭齋画	唐太日記	安政7年(1860)	
30	松浦武四郎	北蝦夷餘誌	安政7年(1860)	
31	整軒玄魚	大日本海岸全図	嘉永6年(1853)	◇
32	新発田収蔵	蝦夷接壤全図	嘉永7年(1854)	□
33	藤田良謙 橋本玉蘭齋縮画	蝦夷闔境輿地全図	嘉永7年(1854)	□
34	工藤東平	大日本沿海要疆全図	嘉永7年(1854)	□
35	松浦武四郎	東西蝦夷山川地理取調図	安政6年(1859)	
36	松浦武四郎	北海道国郡図	明治2年(1869)	□

江戸時代の異国趣味

江戸時代、海のはるか向こうにある国々に対して、人々はどのように向き合ったのだろうか。幕府の政策により外国との交流が厳しく制限された一方で、長崎貿易に代表される対外交易は継続しておこなわれていたこの時代。外国からやってくる人、流入するモノや伝聞は限られていたが、その情報の少なさゆえに、まだみぬ「異国」へのイメージは豊かに膨らみ、憧れの地として、人々の好奇心を大いにかき立てたのである。

そもそも日本と諸外国との接触は、中国や朝鮮半島などの東アジアの国々との交流にはじまる。特に古来より大きな影響を受けてきた中国は、政治・社会・文化など様々な面において理想とすべき存在と考えられた。承応3年(1654)に来日した黄檗宗の開祖・隠元隆琦は、黄檗文化と称される、宗教・建築・芸術・食などの多様な知識と慣習を伝えている。黄檗僧によって請来された陳賢の作品(No.44)は、逸然性融に代表される長崎の「唐絵」成立にも大きく貢献した。また、享保16年(1731)に来日した清人画家・沈南蘋は、写実性を重視した、色あざやかな花鳥画をもたらしした。その画風は南蘋に学んだ長崎の唐通事・画家の熊斐(No.42)の弟子たちによって国内に広まり、当時の日本画壇に新風を巻き起こすこととなる。

一方、ヨーロッパの文化は、16世紀中頃、ポルトガル・スペインとの交易、つまり南蛮貿易によってもたらされた。キリスト教とともに南蛮文化が伝えたものは、医学・天文学・鉄砲製造・食・遊戯など多岐にわたる。芸術面では、イエズス会修道士の指導のもと、西洋画法を学んだ日本人画家によって初期洋風画が描かれた。また、「蒔絵南蛮人文鞍」(No.50、挿図6)は金銀蒔絵によって、様々なポーズをとる南蛮人とその従者をあらわした、異国趣味あふれる作例である。このように、南蛮の人やモノは「異国の珍奇なもの」として意匠化され、後には、豊かな文物を運んでくる吉祥モチーフとして多くの美術品にあらわされるようになった。斬新で煌びやかな服装、珍しい動物、キリスト教を象徴するモチーフなど、それらは当時の人々が「異国」に抱いたイメージを反映している。



挿図6 越前北ノ庄 井関作「蒔絵南蛮人文鞍」慶長9年(1604)

オランダとの交易は慶長14年(1609)にはじまる。寛永18年(1641)には中国・オランダ以外との交易が禁じられるものの、長崎貿易を中心に

ヨーロッパの文化は継続して流入していた。オランダを通じて、医学・天文学といった自然科学にかかわる書物や道具から、銅版画や油彩画、陶磁器、染織などの美術工芸品に至るまで、あらゆる知識と文物が伝えられた。それらは日本国内の医学・科学技術を大きく発展させるとともに、芸術面においても豊かさをもたらしている。

谷文晁「ファン・ロイエン筆花鳥図模写」(No.45、挿図7)は、巨大な花瓶に盛られた豪華な花々が、やが

て朽ち果てる運命にあることを暗示した「ヴァニタス」を主題とする西洋絵画を模写した作品。八代将軍・徳川吉宗の命によって舶載された油彩画を石川大浪・孟高兄弟が写し、それをさらに文晁が模写したものである。西洋の陰影法や立体表現を、日本の伝統的な技法と素材によって再現することを試みた画期的な作品であるといえる。また、西洋の画法や知識に大きな関心を寄せた司馬江漢(No.46)や、四条派の画家でありながら水墨で西洋人物を描いた松尾秀山(No.41)のように、西洋から伝わった知識や美術品をもとに、新たな表現技法に挑戦する画家たちも現れた。荒木如元は、若杉五十八に少し遅れて本格的な洋風画やガラス絵を描いた、長崎の唐絵目利・画家であった人物。「瀬海都城図」(No.37、本書表紙)はアーチ形の画面に、異国風の海辺風景をあらわした油彩画である。広大な海の青色が印象的である一方、人物や船、建物などは緻密に描き込まれており、如元の高い技術が遺憾なく発揮されている。また、この頃、西洋に由来する新奇な視覚表現に人々は魅了される。「浮絵付き のぞきからくり」(No.48、挿図8)のように、透視図法(線遠近法)によって描かれた浮絵や眼鏡絵、それを鑑賞するためのからくりは、庶民にまでもてはやされた。それまでの日本にはなかった、絵の奥深くにまで空間が続く表現は、当時の人々の目を大いに喜ばせたことだろう。



挿図7 谷文晁「ファン・ロイエン筆花鳥図模写」江戸時代、19世紀前期

新たな表現技法を試みたのは絵画作品だけではない。陶磁器や漆器、ガラスなどの工芸品においても、異国を強く意識した作品が製作された。「藍絵花卉文四段重」(No.67、挿図9)などの、今日「京阿蘭陀」と称されている作品には、19世紀以降数多く輸入されていた、銅版転写による絵付が施されたヨーロッパ製陶磁の影響がみられる。その製法は、素焼きした生地に白化粧土を掛け、その上から絵付を施すという、ヨーロッパ製陶器に着想を得たものである。さらに器体を飾る花卉文には、点描やハッチング風の陰影表現を確認することができ、銅版転写絵付を意識した異国趣味に富む意匠となっている。また、輸出向けの漆工芸品には、ヨーロッパの人々がもたらした銅版画などを典拠とする意匠が、蒔絵や螺鈿、青貝細工といった日本の伝統的な技法によって表現されたものもある。日本からオランダに大量に輸出されたこれらは、当時のエキゾチシズムが日本だけではなく、ヨーロッパでも盛んであったことを物語っている。

ここまで、江戸時代の異国趣味について概観してきた。冒頭でも述べたように、当時の人々が外国について知り得た情報は、インターネットが普及した現代からは想像もつかないほど、限ら

出品目録 「江戸時代の異国趣味」(2階 南蛮美術展示室)

No.	作者名	作品資料名	時代	所蔵
37	荒木如元	瀬海都城図	江戸時代、19世紀前期	☆
38	狩野派	南蛮人交易図屏風	江戸時代、17世紀後期	
39		洛中洛外図	江戸時代、17世紀前期	
40		長崎鳥瞰図屏風	江戸時代、17世紀後期	☆
41	松尾秀山	紅毛人風俗図	江戸時代、19世紀中期	☆
42	熊斐	王母献寿図	江戸時代、18世紀中期	
43	伝渡辺鶴洲	樹下双鹿図	江戸時代、19世紀	☆
44	陳賢	倚杖羅漢図	明末~清初、17世紀中期	
45	谷文晁	ファン・ロイエン筆花鳥図模写	江戸時代、19世紀前期	☆
46	司馬江漢	異国工場図	江戸時代、18世紀末~19世紀初期	
47	川原慶賀	長崎港図・ブロンホフ家族図	文政元年(1818)以降	☆
48	歌川豊春 北尾政美	浮絵付き のぞきからくり	江戸時代、18世紀後期	
49	司馬江漢	反射式のぞき眼鏡	天明年間(1781-89)カ	☆
50	越前北ノ庄 井関作	蒔絵南蛮人文鞍	慶長9年(1604)	☆
51		蒔絵鉄砲文大鼓胴	桃山時代~江戸時代、16世紀後期~17世紀初期	☆
52	三池製カ	天正かるた版木重箱	版木:桃山時代 重箱仕立:江戸時代	☆
53	長崎製	青貝細工花鳥文丸机	江戸時代~明治時代、19世紀後期	
54		十字架透し鐶	江戸時代、18世紀	☆
55		洋文字入龍図十字鐶	江戸時代、18世紀	☆

れたものであったに違いない。しかし、もし「鎖国」の時代がなく、諸外国との交流が江戸時代を通じて活発におこなわれていたならば、本展で紹介するような、現代の私たちからみれば少々不自然で、それゆえに魅力的な作品の数々は生まれてこなかったであろう。それらからあふれ出る“わからないからこそ知りたい、想像したい”という人間の本能的な欲求と熱意が、人々の心を強く惹きつけたのかもしれない。



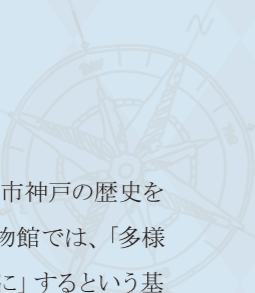
挿図8 歌川豊春、北尾政美「浮絵付き のぞきからくり」江戸時代、18世紀後期



挿図9 京焼系「藍絵花卉文四段重」文化13年(1816)箱書き

No.	作者名	作品資料名	時代	所蔵
56		龍影金象嵌丸鐶	江戸時代、18世紀	☆
57		南蛮船図鐶	江戸時代、18世紀	☆
58		南蛮船図鐶	江戸時代、18世紀	☆
59		南蛮人洋犬鳳凰図鐶	江戸時代、18世紀	☆
60		南蛮人洋犬図小柄	江戸時代、18世紀	☆
61		異国人・洋犬図小柄	江戸時代、18世紀	☆
62		楽器を吹く老南蛮人図小柄	江戸時代、18世紀	☆
63	京都製カ	蒔絵青貝細工ヴィクトル・モロー將軍肖像図ブランク	江戸時代、19世紀初期カ	
64	京都製カ/ 笹屋製	蒔絵カディス海戦図ブランク	1792年	
65	ヨーゼフ・マリアヌス彫板	カディスに近いデ・サンタ・マリア岬における英蘭海戦図(1781年5月30日)	1781年頃	
66	萬古焼	染付洋文字に獅子図水指	江戸時代、18世紀末	☆
67	京焼系	藍絵花卉文四段重	文化13年(1816)箱書き	○
68	京焼系	藍絵西洋風景図刀掛	江戸時代、19世紀前期	
69	「乾齋」銘	藍絵花卉唐草に竜文燭台	江戸時代、19世紀前期	
70	田村宗立	大徳寺焼香図	明治時代、20世紀初期	☆
71	川上冬崖	西面指南	明治4年(1871)	☆
72	中丸精十郎	馬図	明治7年(1874)頃	☆
73	前田吉彦	勤学夜景図—熊沢蕃山、中江藤樹に入門を請う図—	明治17年(1884)	
74	百武兼行	裸婦図	明治14年(1881)頃	

読みなおす、兵庫津



神戸市兵庫区に位置した兵庫津は、港湾都市神戸の歴史を語るうえで重要なトピックである。神戸市立博物館では、「多様な神戸文化の特徴と文化交流の態様を明らかに」するという基本的性格に基づき、兵庫津の歴史に関する資料の収集、調査研究を積み重ねてきた。それにより、平成16年（2004）には特別展「よみがえる兵庫津」が開催され、同展での成果は「神戸の歴史展示室」（1階）の他、当館の様々な活動に生かされている。「コレクション大航海」の終着点として、港湾都市神戸の礎ともいえる兵庫津の当館における調査研究成果を、「よみがえる兵庫津」以後に収集された資料も取り上げながら、読みなおすこととしたい。

兵庫津の成り立ち

兵庫津の源流は、奈良時代に五泊の一つとして整備された大輪田泊おおわだのとまりにさかのぼる。平安時代の末には、平清盛（No.75、挿図10）によって修築され、人工島きやうがしま「経ヶ島」が築かれ、日宋貿易の拠点となった。その後、僧・重源による改修を経て、大輪田泊は兵庫津と呼ばれるようになる。室町時代には日明貿易の拠点として国際貿易港の地位を得た。

応仁・文明の乱の後は相次ぐ武士の争乱に巻き込まれ、兵庫津は国際港の地位を堺に譲ることになった。しかし、それにより兵庫津そのものが衰退してしまっただけではない。西国から奈良や京都への年貢は兵庫津を経由して輸送され続けており、国内流通の拠点としての重要性は失われていなかった。



挿図10 月岡芳年「芳年武者无類 平相国清盛」明治10年（1877）

明応3年（1494）「摂津国山田荘御年貢米銭算用状事（摂津国八部郡丹生山田荘原野村栗花落家文書）」（No.76）からは、年貢の一部が「兵庫」から「宰符（割符）」（遠隔地への送金に用いられた手形のこと、為替）を用いて京都まで送られていたことがうかがえる。神戸市内に遺された資料には、地域の要である兵庫津に対する、金銭の流通ルートとしての信用が健在であったことが伝えられている。

また、兵庫津の隆盛は、そこを拠点とした商人たちの成長にもつながった。近世につながる商家たらい・榎井氏（正直屋）が伝えた古文書からは、武士から経済活動の保証を取り付けていたことがうかがえる（No.79～81）。

兵庫津の姿

江戸時代の兵庫津は、日本有数の港町として繁栄した。西国街道の宿場町でもあったことから、海道と街道の交差点として、多くの人々や物資の往来でにぎわいをみせ、18世紀初期には人口も2万人を数えるようになる。また、幕末には欧米諸国と締結した通商条約において開港場に選定され、さらに、政局の舞台が京・大坂に移ると、畿内における幕府の拠点港として整備が進められていく。

兵庫津の姿は、絵巻、絵図といった資料からうかがい知ることができる。「西国街道絵巻」（No.82）は京都山崎から明石までの西国街道の一部を描いた絵巻であるが、港町として栄え、西国街道の宿駅でもあった兵庫津は大きな町場として描かれる。付近には、社寺や名所旧跡も記載されており、兵庫津周辺の情報が多く求められていたと想像できよう。

今日複数確認できる、兵庫津を描いた絵図は、幕府諸役所からの異なる要請に応じて、兵庫津の町政運営に携わる惣会所が作成・提出してきた控えと考えられる。No.85～87（挿図11）、88を比較すると、約100年の間に海岸部、なかでも湊川河口付近を中心に市街地が急速に拡大していることが読み取れる。



挿図11 「兵庫津絵図」 安政6年～文久2年（1859-62）頃

兵庫津の人々

江戸時代の兵庫津に生きた人々の暮らしぶりはどのようなものであったか。兵庫津遺跡の発掘調査によって、当時使用された陶磁器や木製品、また建物跡が発見されたことで、徐々に明らかになってきているが、資料が残存していないことも多く、全体的な把握は難しい。しかし幸いにも、兵庫津に生きた人々が残した古文書を、「よみがえる兵庫津」展以後、当館で新たに収集することができた。

明和6年（1769）の上知じょうちにより、兵庫・西宮及び灘目の尼崎藩領は幕府領に編入され、兵庫・西宮には大坂町奉行所の出張



挿図12 「兵庫勤番文書」 江戸時代、19世紀

所である勤番所が置かれることになった。各勤番所には大坂町奉行所から与力・同心が月番で派遣され、これを兵庫勤番・西宮勤番と呼ぶ。仁木謙吉をはじめとする兵庫勤番与力のもとで

出品目録 「読みなおす、兵庫津」（2階 特別展示室2）

No.	作者名	作品資料名	時代	所蔵
75	月岡芳年	芳年武者无類 平相国清盛	明治10年（1877）	
76		摂津国山田荘御年貢米銭算用状事（摂津国八部郡丹生山田荘原野村栗花落家文書）	明応3年（1494）	
77	歌川国芳	太平記英勇伝 荒儀摂津守村重	弘化4年～嘉永5年（1847-52）	■
78		摂州鼻熊合戦図（題箋）	江戸時代、17世紀	
79		安宅鴨冬書下（榎井家文書）	天文23年（1554）	●
80		室町幕府評定衆并奉行人連署下知状（榎井家文書）	永禄12年（1569）	●
81		羽柴秀吉船役銭請取状	天正11年（1583）	●
82		西国街道絵巻	江戸時代、17世紀	
83		大坂より松江まで航路図	江戸時代、18世紀	
84		尼崎より明石まで道中図	江戸時代、19世紀	
85		兵庫津絵図	明和6年（1769）	●
86		寛政九年兵庫津絵図（榎井家文書）	寛政9年（1797）	●
87		兵庫津絵図	安政6年～文久2年（1859-62）頃	
88		摂州兵庫津細見之図	慶応3年（1867）	
89	秋里籬島	摂津名所図会	寛政10年（1798）	
90	若林秀岳	神戸覽古	明治29年（1896）	
91		和田岬砲台写真	1870年代初期	
92	一養亭芳滝	神戸海岸ヨリ兵庫和田ノ岬望む図	明治4年（1871）	
93		神戸市兵庫港和田岬私立水族放養場実測三百分之壹縮図	明治29年（1896）	

作成された「兵庫勤番文書」（No.94～99、挿図12）は、文書としての役目を終えた後、某寺院の襖の裏貼りとして再利用されていたことで、今日まで遺された。これにより、西摂地域の治安維持にあたった勤番所の実務実態があきらかとなった。

西国の特定大名と密接な関係をもった兵庫の間屋業者である「浜本陣」の一つに伝わった「浜本陣絵屋（鷹見）右近右衛門家文書」には、大名の参勤交代の際の本陣の様相がわかる資料（No.103）も含まれる。その他、兵庫津の人々が遺した資料からは、彼らのたくましい生き様を感じることができる。

本展示は、展覧会の終着点ではあるが、当館における兵庫津研究の終着点ではない。新たな大航海の船出にむけた、貴重な資料との出会い、調査研究の進展が望まれる。

No.	作者名	作品資料名	時代	所蔵
94		〔当津湊川往還行倒死あり小頭内意書申出、吉兵衛召捕の件〕（兵庫勤番文書）	江戸時代、19世紀	
95		〔今出在家町網屋甚右衛門持屋敷板取取の件、他二件〕（兵庫勤番文書）	江戸時代、19世紀	
96		〔無宿長兵衛風体怪敷二付小頭共召捕内意書差出の件、大坂表松島梅松一座歌舞伎興行の件〕（兵庫勤番文書）	江戸時代、19世紀	
97		〔加州・尾州廻船作事の件につき断書など〕（兵庫勤番文書）	江戸時代、19世紀	
98		〔松平大膳太夫殿米船破船二付大坂蔵屋敷詰役人罷越、などの件〕（兵庫勤番文書）	江戸時代、19世紀	
99		下（越後国御廻米御用船造立之儀二付非常手当申渡）（兵庫勤番文書）	江戸時代、19世紀	
100		朝鮮通信使行列図屏風	江戸時代、17世紀	●
101		黒田長政書状（兵庫浜本陣絵屋（鷹見）右近右衛門家文書）	江戸時代、17世紀	
102		絵屋右近右衛門居宅墨引（兵庫浜本陣絵屋（鷹見）右近右衛門家文書）	宝暦12年（1762）	
103		御本陣絵図（兵庫浜本陣絵屋（鷹見）右近右衛門家文書）	宝暦12年（1762）	
104	鷹見保具	雨粟記（兵庫浜本陣絵屋（鷹見）右近右衛門家文書）	江戸時代、18世紀	
105		次第不同關順定 浪花左界兵庫他国取引通路便鑑 商家繁栄歳中日用記	文久2年（1862）	☆
106		南条治郎兵衛家使用 切溜	江戸時代末～明治時代	
107		南條治郎兵衛家風呂敷	明治時代～昭和時代	
108	垣貫興祐	豪商神兵湊の魁	明治15年（1882）	
109		紙商・南條治郎兵衛南條支店引札	明治時代	
110		〔高松藩の兵庫警備に関する御用働きに対し下賜金等申渡〕（兵庫浜本陣網屋（南條）新九郎家資料）	文久3年～元治元年（1863-64）	
111		兵庫津浦手形	天保7年（1836）	●
112		兵庫津北濱鍛冶屋町宗旨巻	安政4年（1857）	

ごあいさつ

神戸市立博物館は神戸の歴史的特性をふまえ、昭和57年（1982）の開館以来、「国際文化交流-東西文化の接触と変容」を基本テーマとして日々活動しています。令和元年（2019）のリニューアル工事では新たにコレクション展示室を設けることで、約7万点におよぶ収蔵品の数々をみていただく機会を増やすことができました。今回の工事休館は、直接皆様の目にふれる内装にかかわる工事ではなく、外壁補修や空調設備改修など、登録有形文化財の建物を博物館として活用し続けるためのものでした。この工事完了を記念して、展覧会を開催いたします。

本展では、人や文化がつながり、まじわる「海」という共通テーマのもと、古地図、美術、考古・歴史の各分野のコレクションを紹介いたします。コレクション展示室のケースより大きな資料や、なかなか展示の機会に恵まれなかった資料など、当館収蔵品の数々を大公開いたします。

最後になりましたが、開館を心待ちにくださった皆様にあらためて感謝申し上げます。ともに、あらたなる船出に乗り出しましょう。

2月10日

神戸市立博物館

凡例

- ◆本書は神戸市立博物館企画展「コレクション大航海 蝦夷 発→異国経由→兵庫行」（会期：令和6（2024）年2月10日（土）～3月17日（日））の展覧会パンフレットである。
- ◆解説文は、「蝦夷地へのまなざし」を鈴木更紗、「江戸時代の異国趣味」を山田麻里亜、「読みなおす、兵庫津」を三好俊がそれぞれ執筆した（いずれも神戸市立博物館学芸員）。
- ◆本書の資料番号と展示会場の出品番号は一致するが、展示の順序とは必ずしも一致するものではない。
- ◆出品目録は、作者名・作品資料名・時代・所蔵の順に記載した。作者名を記さないものは作者不詳である。所蔵について、記載のないものは当館蔵、●は当館寄託を意味する。また、当館所蔵品のうち、□は南波松太郎コレクション、◇は秋岡武次郎コレクション、☆は池長孟コレクション、○はびいどろ史料庫コレクション、■は別車博資浮世絵コレクションを意味する。
- ◆解説のキャプションは、作者名・作品資料名・時代の順に記載した。

コレクション大航海

えぞ いこく ひょうご
蝦夷発→異国経由→兵庫行

編集 神戸市立博物館 Kobe City Museum
〒650-0034 神戸市中央区京町24番地
TEL 078-391-0035 FAX 078-392-7054
発行 神戸市立博物館
発行日 令和6年（2024）2月10日
制作 丸山印刷株式会社

©神戸市立博物館
本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます。